



新撰軍歌抄全

陸軍中將鳥尾小彌太君題字  
同大佐山根信成君序文  
山口縣大庭景陽編纂

明治二十一年五月刊行



もの・哀をしり顔に  
千百万の敵軍も  
思へる我等が袖迄も  
新撰軍歌抄終

今日のものこそ哀けれ  
取て來ぬへきまをらをと  
涙の雨ふぬれにけり

四十五)  
明治十九年十一月十七日  
同 年十二月 出板御届  
同 二十一年五月 再 板

大庭

陽

印刷兼發行者

岡島 幸次郎  
東區南久寶寺町四丁目九番地  
岡島 眞七  
東區本町四丁目五十九番地

發賣者

序

軍歌者何。軍隊行進中。所諷唱  
之詞曲。而能使士氣凜烈者也。  
若夫行悠遠。長途。登峻嶮坂上。  
神心倦屈。身體疲勞。當此時也。  
一齊大音。諷唱而進焉。不啻忘  
疲勞。倦屈。勵快活之勇。發忠憤  
之義。其益於軍隊。決非小少也。



頃者大庭景陽袖新撰軍歌抄  
一卷來乞余序。余繙讀之有詞  
曲壯快足凌清霜者矣。即題數  
言於卷首云爾

明治十九年四月

山根信成撰

軍歌抄

山根信成

白

白

忠勇



例言

軍歌ハ歐洲各國ノ軍隊ニ用フルモノニシテ其章句音調等ニ至リテハ各國少異アリト雖之ヲ要スルニ行軍中欠ク可ラサルモノトス蓋シ行軍途上之ヲ諷唱スレバ奮ニ身体ノ疲勞ヲ醫スルノミナラズ兵士ヲシテ其志氣ヲ振起セシメ其精神ヲ勇壯ナラシムルノ利益アレハナリ聞ク頃日我邦各鎮臺ニ於テモ亦漸ク之ヲ用ヒラルト因テ目下專ラ世ニ行ハル、諸家ノ製作ニ係ル新體ノ詩ニシテ軍歌ニ適合スルモノ若干章ヲ編纂シ以テ急需ニ充テントス

一軍籍ニ在ラザルモノト雖一一般ニ之ヲ暗記シ之ヲ諷  
唱スルニ至レバ夫ノ軟弱鄙猥ナル鄭整ノ俚曲ヲ口ニ  
スル者ノ自ラ地ヲ拂ヒ尙武ノ精神ヲ振起シテ日本男  
兒ノ本色ヲ保持スルノ効アラシク且ツヤ郊外ノ散策  
登高長途ノ旅行之ヲ諷唱スレバ自ラ寂寥ヲ忘レ疲勞  
ヲ慰ム又春日花園ヲ逍遙シ秋夜月下ヲ徘徊スルノ時  
之ヲ口吟セバ意爽カニ着揚ル軍歌豈ニ獨リ軍人ニ要  
アルノミナランヤ

一音節并ニ諷唱ノ方法又樂譜ノ如キハ早晚官ニ於テ規  
定セラレ、トコロアルセシ今姑ク普通ノ例規ニ據リ

實際ノ步調ニ照シ左ニ其大畧ヲ假説ス

○音調ハ世俗謠ノ所ノ壬翰歌音節ノ頗ル步調ニ適  
合スルヲ以テ乃チ之ヲ用フベシ

○軍隊ニ在リテハ最初先ツ中隊毎ニ一人一句ヲ諷  
唱シ尋テ全員同聲ニ之ヲ和スルモノトス各自既  
ニ唱記スルニ至レバ一小區隊毎ニ一句ツ、交互

諷唱スベシ

○左足ヲ進始ムルト俱ニ一句ヲ諷唱シ始メ而シテ  
底左足ヲ進止ムルニ諷唱シ終ル乃チ七步ニシテ  
一章ヲ了スナリ若夫原歌ノ章句口調ノ佳ナラス

(九)

新撰軍歌抄

目次

- 凱戦の歌
- 軍旗の歌
- テニソン氏輕騎隊進撃の詩
- 兵士の歌
- 扶桑の歌
- 拔刀隊の歌
- 熊本籠城の歌
- カムベル氏英國海軍の歌
- 西郷追慕の歌
- 日本刀の歌
- 護國の歌
- 小楠公決死の歌
- 櫻の歌
- 軍歌
- 進軍歌
- 復右の歌

大庭見景 立山正景 外山正景 福山正景 大庭山正景 矢野正景 勝庭正景 大庭正景 橋本正景 大庭正景 同前 同前

陽文 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一 陽一

シテ歩調ニ適合シ難キハ其章尾ノ句ヲ復唱ス  
 ベシ然ルハハ十一歩ニシテ一章ヲ了スルナリ  
 ○未ダ軍籍ニ入ラザル者ハ軍隊ノ歩調ヲ知ラズ故  
 ニ前項ニ陳フルガ如ク先ツ左足ヨリ踏出一章ヲ  
 七歩或ハ十一歩ニ諷唱シ了スベシ數人相會シテ  
 諷唱スルハ即チ區隊諷唱ノ方法ニ從フ可ト  
 ス

明治十九年三月

編者 識



一行軍歌  
一楠正成遺訓の歌  
一小楠公を詠する歌

○附録喇叭吹奏歌

同同同  
前前前

(十)

君か代  
海もかば  
皇御國  
國の鎮め  
命を捨て、  
扶桑歌  
あらし岩根  
おほ君の  
ふきなす笛

以上

新撰軍歌抄

凱戦の歌

第一節

(一十)

柳櫻をこぞ交せし  
吹き翻へる日章旗  
欣び迎ふ國民の  
歩兵騎兵の肅々と

第二節

勇む喇叭の聲々を  
勇む兵士に勇む駒  
旗も勇めば大筒も  
勇みくし兵士や

雲心醉士大庭景陽編纂

大庭景陽

都の春の朝風に  
今日凱戦の我軍を  
見渡すはるか彼方より  
喇叭の聲の勇まし、

聞く國民の氣も勇む  
凱歌の聲も勇むなり  
小筒ともに勇むなり  
喇叭の聲の勇まし、

(二十)

第三節

勇む兵士も戰場も  
霰ふる日も雨の夜も  
火玉飛來るそが中も  
爲と思へばいといなは

第四節

わな勇しの兵士や  
修羅の巷に出で入し  
銃と名譽を擔ひつゝ  
柳樓もうらゝかよ

軍歌の歌

第一節

二千五百年以來

光り輝やく日本國

と君どのそが爲に  
萬死の中に生を得て  
歸る都の春景色  
喇叭の聲の勇まし  
立見尙文

し辛苦へ幾許ぞ  
の刀の

何にか厭はん大君の  
喇叭の聲も勇まし

(三十)

其國守る軍人よ

我大君の御標ぞ  
いかなる敵をも打攘へ  
地球の上に輝かせ  
忠と勇とよ此旗を

第二節

昇る旭と諸ともに  
汝を援い給ふべし  
此八州國の内ならで  
神切皇后豊太閤  
忠と勇とに此旗と

第三節

四方海なる日本國

汝の仰ぐ大旗の

君の仰せを畏みて  
忠と義とに此旗を  
いかなる冠をも打攘へ  
地球の上に輝かせ

代々の皇の神々の

汝の切を立る場  
國々にありと知れ  
昔の切烈想ふべし  
の上と輝かせ

砲臺よりも艦よりも

(四十)

未頼母しき金城の  
翼猛かる鷲迎も  
我皇國に冠をなす  
雷なせる大砲と  
いかなる敵をも打攘ひ  
地球の上は輝かせ

第四節

皇國の靈と軍人が  
音の弓矢鎗刀  
汝が帶る銃劍の  
揮ふべき時ふるひつゝ  
此大旗を押立て

第五節

汝等忠義の軍人ぞ  
爪牙鋭ら獅子迎も  
兇者どものあるならば  
電光欺く劍もて  
忠と勇とに此旗を

用ふる利器の何者ぞ  
今へ銃砲軍艦よ  
大和魂ある人の  
鷲をも獅子をも打攘ひ  
いかなる敵をも打攘へ

(五十)

我大君の御標を  
益々光り輝き  
吾人陸海軍人の  
祝ひ唱へて悦ひて  
烈き戦ひすみし時  
益す光り輝き  
御稜威の世界は響くらむ

テニソン氏輕騎隊進撃の詩

第一節

一里半なり一里半  
死地に乗入る六百騎  
士卒たる身の身を以て  
答をなすも分ならず

國の光と建る旗  
冠を平け民を撫て  
切願響めて諸人が  
榮譽の限りあかるべし  
國の光と之旗と  
萬世不朽の帝國の  
御稜威の世界に響らむ

外山正一

彈丸

並びて進む一里半  
將の掛れの令下す  
譯を料すの分ならず  
これ命これに従ひて

死ぬるの外にあらざらん

第二節

前を望めば大筒ぞ

共に打出す砲聲の

響の如く凄まじや

猛り勇んで進撃の

勇んで乗り入る六百騎

(六十)

第三節

抜けば王ちるやいばをば

さらしくと煙かし

大砲方をなて切りて

煙の中は飛込みて

太刀の早業見せよて

死地に乗り入る六百騎

右も左りも又筒ぞ

天に轟くいかづちの

彈丸雨飛の間よも

死地にこそ入れ鱗の口

皆諸どもに振かざし

敵陣近き乗りいりて

最と目冷しき働さぞ

烈し陣破らなり

敵の軍勢たぢくと

群くばつと群くづれ

以前に進みし六百騎

遂よさふる事ならず

馬の頭ぞ立直す

残るはいといわづかなり

第四節

右を望めば大筒ぞ

共よ打出す砲聲は

彈丸雨飛の其中に

死地より出て、乗り歸へす

歸るは元の一里半

残るはいといわづかなり

第五節

あゝ勇ましさもの、ふの

手柄は永く傳へなん

左りも後も又筒ぞ

天に轟くいかづちぞ

縦横むじんに切り魔く

わにの口より脱れ出で

六百人の其中で

よに香しき其響

今のおさなで生立て

とる年あまた重りて  
頭に霜載いたをきて  
六百人の豪がうけつか  
そのふる事を物語り

兵士の歌

第一節

(八十)  
皇國みくにの爲と君の爲  
我國わがくにむかし忠臣と  
皇みら帝みかどの御爲に  
ともに屍はらねは消れども  
我大君わがみの大御稜威いづつと  
共に世界に輝けり

第二節

こしはあづさの弓となり  
孫まごひこやしやご多き時  
敵の陣へと乗り入れる  
未代までも名は朽ちじ

大庭景陽

力を盡すは人の義務  
仰あやみ尊ととむ楠公は  
湊河原の朝露と  
香しき名は今もなほ  
我日の本の國光と  
共に世界に輝けり

(九十)  
皇國みくにの爲と君の爲  
國くにに冠あなす敵あらば  
君きみに叛そむける賊そむあらは  
彈丸たまも中ならさけはせず  
切名きりな手柄て顯あらして  
其名を世界に輝かせ

第三節

皇國みくにの爲と君の爲  
死人しみての山みを踏越あへて  
屍はらねをあれ野のに曝さらすとも  
天あま羽はり來きて事ことあらば  
靖國やま神かみに祭まつられて  
其名を世界に輝かせ

兵士へいしとなるば民の義務  
進んで之を打攘へ  
進んで之を打攘へ  
劔つるぎも我身わがみを刺さはさせ  
我日の本の國光と  
其名を世界に輝かせ

死するは兵士の常なるぞ  
劔つるぎ花の下にたをるへし  
なを其靈たまば消やらず  
國と君とを守るへし  
我日の本の國光と  
其名を世界に輝かせ

扶桑の歌

皇尊の統御す

一世の如く神ながら

猛くを、しく平けて

其大威朝宵よ

仕へまつるふ人民は

一つ心に集もひて

然ればこそ世に我國を

浦安國と稱へたり

援刀隊の歌

第一節

我は官軍我敵は

敵の大將たる者の

福羽美静

我日の本は十五百世も

治め給へば大御稜威

豊かに安くありとかや

あやに畏み安國と

いやます益々真心の

我日の本を守りける

浦安國と稱へたり

外山正一

天地に容れざる朝敵ぞ

古今無雙の英雄と

共に慄捍決死ハ士

天の許さぬ叛逆を

榮えし例しあらざる

進めや進め諸共に

死ぬる覽悟で進ひべし

其身を護るたましいの

日本刀の今更よ

敵も身かたも諸共に

大和魂ある者の

人に後れて耻くかな

進めや進め諸共よ

死ぬる覺悟で進ひべし

(一十二)

皇國の風と武士の

維新このかた廢れたる

又世に出るるつるぎ太刀

刀の下よ死すべきぞ

死すべき時は死すべきぞ

敵のはるふる夫迄は

玉ちる劔ぬき連れて

第二節

第三節

(二十二) 前を望めば劔なり  
つるぎの山に登らん  
此よに於てまのわたり  
わが身のなせる罪業を  
賊を征伐するが爲  
てきの亡ぶる夫迄  
王ちる劔抜きつれて

第四節

つるぎの光ひらく  
四方に打だす砲聲  
敵の刀に伏す者や  
たゑて墓なく矢する身の

其血ば流れて川をなす  
敵の亡ぶる夫迄  
玉ちる劔抜きつれて

第五節

(三十二) 彈丸雨飛の間にも  
進む我々は野嵐に  
暮なき最後とぐるとも  
死て甲斐あるものならば  
我と思はん人たちは  
敵の亡ぶる夫までは  
玉ちる劔ぬきつれて

第六節

我今茲に死ん身は

右も左も皆劔

未來の事と聞きつるよ  
劔のやまに登るのも  
はるばす爲にあらすして  
つるぎの山もなんのその  
進めや進め諸ともに  
しぬる覺悟で進むべし

雲間に見ゆる稻妻か

天を響く雷か

丸にくだけて玉の緒の  
なばねの積みて山をあし  
死地に入るもの君が爲  
進や進や諸共よ  
死ぬるかくこで進むべし

二ツなき身を惜まずよ

吹かれてさゆる白露の

忠義の爲に死ぬる身の  
死ぬるも更に恨なし  
一歩も後へ引くなかれ  
進めや進め諸共よ  
死ぬる覺悟で進むべし

君の爲なり國の爲

(四十二)

捨つべきものは命なり  
忠義の爲に捨るみの  
長く傳へて残るらん  
義もなき犬とは云る、な  
敵の亡ぶる夫までは  
たまらる劔抜きつれて

熊本籠城の歌

西も東もみみ敵ぞ  
寄せ来る敵の不知火の  
世にも名高き猛ら夫の  
西九洲に名も高き  
敵の總督隆盛は  
之に従ふ大將は

(五十二)

中にも邊見十郎太  
其外兵士二三萬  
進み打出す砲聲よ  
天地はくされ山河は  
動かぬもの、君が御代  
忠義の旗をふりかざし  
唯一筋に國のため  
過ぎし普佛の戦ひに  
長く青史を汚したり  
千窟ちほくの城の楠公の  
谷少將を始めとし  
家をも身をも打忘れ  
此時都の方より

令ひ屍は朽ちぬとて  
名の香しく後の世に  
武士と生れた甲斐もなく  
卑怯者ひきやうものとなそしられなく  
進めや進め諸共に  
死ぬるかくこで進むべし  
大庭景陽

南も北も皆てきぞ  
筑紫のはての薩摩方  
たけり狂ふて攻め來り  
熊本城を圍みけり  
古今無双の豪けつで  
洞野篠原村田かど

鷹捍決死の烈丈夫

何れとどらぬ薩摩武士  
天地も崩る、ばかりなり  
烈るためしのあればとて  
城の中なる官軍の  
死を視る歸する如くにて  
進み進んで防戦す  
葭土やつちの城の降りし  
夫れに、あらで城中の  
睢陽城すいようの張巡てうじゆんの  
下も兵率に至るまで  
一心不乱いっしんふらんと防戦す  
の御旗ひるがへし



(六十二)

多くの官軍出陣す  
空飛ぶ鳥のそれならで  
城中城外諸共に  
折柄猛き若者が  
單身險を提げて  
蟻のい出る穴もなき  
都の軍に身を投じ  
語りつ問いつ示しあい  
爰に始めて連らくの  
池中の魚も時を得て  
進めくくの号令に  
にし北みあみ東なる  
空前絶後の切を立て

されども城の連絡の  
つばさなければ通ひ得ず  
音信する由あかりけり  
國の爲とてけな氣よも  
城をいでつ、夜も乗じ  
賊圍の中を潜りいで  
城の中なる有標を  
賊兵原を打破り  
解けてうれしき厚氷  
おどる心の活潑地  
萬銃天地に鳴り響き  
圍みの賊を打攘ひ  
名を掲げ父母を顯せし

我日の本のますらを  
響め羨まぬ者ぞなき

響め羨まぬ者ぞなき

カムベル氏英國海軍の詩 矢田部良吉 第一節

(七十二)

イギリス國の海岸を  
一千年の其間  
戦争のみか嵐をも  
敵を受くともたのみなく  
軍烈しくあらばわれ

固く守れる水兵は  
汝が立る大旗は  
支へ得たれば此後と  
勇氣の限りひるがへせ  
嵐も強く吹かばふけ

第二節

立くる海の浪間より  
汝を援けたまふべし  
其甲板はてがらの場

汝が祖先あらはれて  
盪し祖先が軍艦の  
大海原は其墓場

大チルソイヤブレー  
軍烈しくあらばあれ

第三

四方海あるブリタニヤ  
山とたちくる波とても  
慣れて我家に異ならず  
船より放ち轟かし  
軍烈しくあらばあれ

第四節

國の光とたてし旗  
危難も都て解去りて  
其時汝つはもの、  
歌に唱ひて悦ひて

死よし處は人しのぶ  
嵐も強く吹かばふけ

りでも城も用はなし  
千尋のそこの淵とても  
いかづちおせる大砲を  
波をわけつ、進み行く  
嵐も強くふかばふけ

益々光輝ぎて  
大平の目よもどるらん  
いさはし響て諸人が  
安樂限りあかるらん

烈しき軍すみし時

西郷追慕の歌

(九十二)

夫れ達人は大觀す  
榮枯の夢か幻しか  
眞如の月の影清く  
何を怒るやいかり猪の  
勇みよいさむいやり雄の  
若殿原よむくひなん  
諸手の軍打やぶれ  
霜の紅葉のくれなるの  
薩摩武雄のをたけひよ  
霰たばしる如くにて  
氷魂よ響くときの際

強き嵐のやみし時

勝安房

拔山蓋世の雄あるも  
大隅山の獵倉に  
無念無想を觀すらん  
俄よげさする數千騎  
騎虎の勢ひ一てつに  
明治十年の秋の末  
打ちつ打れつ頓てちる  
しほにそめど願みぬ  
ちるたまの板屋うつ  
面をひけん方ぞなき  
百の雷一ト時に

(十三)

落つるが如き有様を  
あな勇しの人々や  
うでの力もためし見て  
いざ諸共にの塵世を  
只一ト言を各殘にて  
宗徒の輩もろとも  
心の中こそ勇しけれ  
きのふの陸軍大將と仰れ  
類なかりし英雄も  
山下つもと消へて、  
無常を深く感じつ、  
たゞ悄然と隊伍を整へ  
折しもあれや吹き下ろす

打見は、ぞ笑み  
年の年以來やしなひし  
心に残る事もなし  
脱れ出でん此時と  
桐野村田をはじめとし  
煙と消へしますら雄の  
官軍これを望み見て  
君の寵遇世の覺る  
けふのあへなく岩崎の  
れば替る世の中の  
無量の思ひ胸よ、ち  
と目を見合す計なり  
城山松の夕あらし

谷間にひす谷水の  
悲鳴するかと聞なされ

日本刀の歌  
第一節

(一十三)  
氷か雪かはた霜か  
光りも寒く又凄く  
實にも貴とき日本刀

第二節

百練千磨の刃を経て  
忠魂義膽は鐵壁の  
動かぬ君が大御代と

第三節

扱けばさらめく青蛇の

非情の色もなよとなく  
戎服の袖を濡らしそるるん

大庭景陽

氷より清く潔よく  
凛然萬古に輝きし  
世界に類ひあかりけり

さたい出せる丈夫の  
城より堅き頼母しさ  
世界に類ひなかりけり

振舞來れはれつ日に

霜雪飛す心地よさ

日本刀の切れ味ぢは

第四節

我國勇氣の存亡は

此の寶刀のなかりせば

實も貴とき日本刀

護國の歌

第一節

汝等朕の脇股ぞと

義は山岳もたいならす

護れや守れ軍人

第二節

我を育てし父母の

姦臣賊子を倒す

世界に類ひなかりけり

此の寶刀に因るぞかし

大和だましひ地に墜ちむ

世界も類ひなかりけり

作者詳ナラス

最も畏きみことのり

死は鴻毛と覺悟して

皇國を護れ諸共に

墳墓の國とは此國ぞ

死して忠義の鬼となれ

皇國を護れ諸共に

兼て覺悟の前なるそ

忠義と名譽を盾にして

皇國を護れ諸共に

當る鋒も強くとも

一步も後に退かず

皇國を護れ諸共に

汚れしとならば國の名を

突れぬ様覺悟して

(三十三)

父母に孝ある者ならば  
護れや守れ軍人

第三節

國の大事に死するの

水火の中も何のその

護れや守れ軍人

第四節

寄せ來る敵の多くとも

旭の御旗をしたらて、

護れや守れ軍人

第五節

二千五百有餘年

汚せし者そと後の世に

護れや守れ軍人

第六節

玉あられの露と飛ひくるも

大和魂あるもの、

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

劔の林を成すとても

恐る、とはあるべきぞ

皇國を護れ諸共よ

(四十三)

劔も我身よたちはせし

皇國を護る兵もの、

護れや守れ軍人

第七節

丸も我身はどほしるじ

身は鐵てつよりも尙堅たし

御國を護れ諸共よ

昔よりして今までも

國をあいする兵士に

護れや守れ軍人

第八節

民を愛する大君と

勝つべき者は世にあらじ

御國を護れ諸ともに

(五十三)

文明開化の春風よ

我しきしま敷島の山櫻

護れや守れ軍人

第九節

今を盛りとさき香ふ

異國の嵐に散さじと

皇國を護れ諸共に

第十節

昇のぼるあさひとの國名を

千代も八千代も萬代も

護れや守れ軍人

地球の上よ輝かし

香しき名を殘さんと

皇國を護れ諸共に

小楠公決死の歌

正平四年正行は

四條たひそがの隆資郷をへて

先臣正成勤王の

打亡して先帝の

橋本謙作

吉野よしのの皇居こうきよよ叅内さんないし

心の中をぞ奏しける

軍を起し朝敵を

慮慮を安めまいらせし

(六十三)

其後天下又乱れ  
都をさして攻上り  
終に津の國兵庫なる  
戦死をこそへ遂げたりき  
其時正行漸よく  
一の場へと供ともなないで  
敵を亡し我君の  
殘し訓し言の葉の  
然るに正行今の早や  
今に及びて朝敵を  
いつとか待ん人の身の  
病の爲めに死しもせば  
父の爲めに不幸なり

逆臣尊氏筑紫より  
正成覺悟や定めけん  
湊河みなとがほにていさぎよく

十一年になりぬるを  
河内へ送り歸しつゝ  
御代になせよと細々こまよ  
今尙耳に留まれり留れり  
年も二十となりければ  
打亡さで過しなば  
思ふよ任せぬ習にて  
君の爲めに不幸なり

(七十三)

されば此度師直と  
彼か頭を正行が  
頭をかれに取らるゝか  
雌雄しゆうを定め申すべし  
今度の軍正行が  
今生こんじやうにての今一度  
申しも敢ぬす涙あみだをば  
義心氣色に見ゑたりき  
天子御籐みともをば掲げさせ  
此度數度の戦ひに  
敵慮を慰するに足ぞかし  
父子累代るいの勳切くんは  
朕ちんは汝にを眩股こころとす

手痛き軍を仕り  
手に打取るか正行が  
二つの中に戦ひの

必死の覺悟に候へば  
龍顔りゆうがんをがませ玉はんど  
鎧の袖にそゝぎつゝ  
近く召れて正行よ  
敵の勇氣を摧くだしは  
深く感ずる所なり  
必ず命を全ふす

王家の重きに任せんと  
正行首を地に着けて

思ひ定めてしりぞきぬ  
斯くて一族郎黨と

参りて御暇を申上げ  
各らの名字を書き連ね

兼て思へば杖弓  
記し留むと鐵もて

芳野を出て勇ましく

櫻の歌

我國守る武士の

朝日にははふ山櫻

左近の花に風吹かば

樂どり直して守るべし

其色其香たえかるも

花散る事はなきぞかし

聖帝の大御代と

櫻花こそ愛たけれ

夜る行宮にしあなきじやうのび入り

赤き心を黒染の

世にも稀なる忠烈ば

去れば今尙武士が

三郎如き忠臣を

國よ仇する者あるか

忠義の劔ふりかさし

國平らけく安らけく

是 北の...  
是 北の...

後醍醐帝の御陵へ

如意輪堂の板壁に

又其奥に歸らじと

無き人数も入名をば

一首の歌を書き残し

四條の繩手に向ひる向ひる

大庭景陽

大和心と人問は

さくや霞も九重の

まもれやく武士よ

櫻は忠義の花なるぞ

浮簿の風にさそわれて

千春萬春動かざる

共に世界に例しなき

昔し兒嶋の三郎は

十字の詩をも作りなし

花と其香を競ひける

鬼神とても泣かんめり

花見るたびは古の

羨み慕ひ慷慨し

國よ敵する者あらば

只一打にさり倒し

聖帝の御威徳を

ひろき世界に輝かし  
千春萬春を迎へんと  
我武士の忠烈は  
櫻と共に例なし

軍歌

第一節

(十四)  
來れや來れいざ來れ  
寄せ來る敵は多くとも  
死すとも退くと勿れ

第二節

進めや進めいざ進め  
劔は林を爲すとも  
死すとも退くと勿れ

櫻の花と諸共に  
やたけ心のいや勝る  
櫻と共に例なし

御國を守れや諸共よ  
恐る、勿れ恐る、な  
御國の爲なり君のため

彈丸は霞と飛び來るも  
たのらふとなく進みゆけ  
御國の爲なり君のため

第三節

勇めや勇めや皆勇め  
御國を守る兵士は  
死すとも退くと勿れ

第四節

(一十四)  
勉めよ勉めよ皆共に  
汚せしものぞと後の世に  
死すとも退くと勿れ

第五節

懷へよ懷へよよくをもへ  
我身の失せざる其中は  
死すとも退くと勿れ

第六節

神より受けたる此國は  
人手よ決して渡さずと  
御國の爲なり君のため

劔も彈丸もなんのその  
身は鐵よりも尙堅し  
御國の爲なり君のため

汚しとなき國の名を  
言れぬよふにと覺悟して  
御國の爲なり君のため



守れや守れや皆守れ  
恐る、ものは父母の  
死すとも退くと勿れ

第七節

恐る、勿れ恐る、な  
國をば愛する兵ものに  
死すとも退くと勿れ

第八節

進めや進めやみな進め  
命を惜まず進み行け  
死すとも退くと勿れ

第九節

進めや進めや皆進め

異國のぞれいと成ることを  
墳墓の國をば能く守れ  
御國の爲なり君のため

民をば愛する我君と

かつべき者は世に非ず

御國の爲なり君のため

腐りし心のなきものは

御國の旗をば押立て

御國の爲なり君のため

御國の旗をば押立て

進めや進めや皆進め  
死すとも退くと勿れ

進軍歌

彈丸は霰と空に飛び  
雷撥ふ砲聲に

(三十四)  
我魂の緒も打絶ん  
進むに猛き武士は  
屍は野邊に曝すとも

櫻と匂ふ九段坂  
祭り納にし諸靈は

冠なす戎夷盡るまで

何爲厭はん敷島の  
堅固よかたき金剛の

祖先の國をば守りつゝ

御國の爲なり君の爲

劔ば野邊の雷か

吹き來る風も腥く

今ばの時そ勇壯しく

暉騰ふとは何のその

名は后代に馥郁しく

空に聳ゆる靖國の

是大丈夫の鑑ぞへ

假令へ火の中水のそこ

俊魂飽くまでも  
石より光輝灼々は

人皆なへて羨慕す  
里人に品高く

復古の歌

王政復古のそのかたを

三とせの冬の十二月

都の空にたちかへる

世はかりともみだれつこ

鞍馬にひいくとさきの聲

星のくらるも三臺の

あかつき暗き烏羽伏見

錦の御旗ひるがへし

勇氣いやますらをが

轟さめたる修羅の道

青はくをせる桐の章  
錦繡をかざる心氣よき

をもへば凄し慶應の

九日の日をばじめにて

春の光りもうばたまの

あやめもわかぬ黒染の

よるひの袖は輝くや

影うすれ行さしくしの

大内山のやまかせに

大將軍のいでましに

いくさよばるも雷と

斬りつ斬れつ阿毘吠喚

赤き心をとりとりに

敵か身方が彼はたれぞ

習ひ常なきつもの身と

君をぬすれぬ武士の

天地もうごく震動に

よはへる雲の忽よ

きへて治る君かよの

ひかしがたりと過しよを

老たるかけもかつ見ゆる

(五十四)

らしはに染るもみぢばの  
例れかさなるしかばねば  
踏だしきもく戦場の  
翳すつるぎのつかの間も  
道のはてこそあはれなり  
炎さかまく淀の城  
煙のすへのかげろふも  
のどけき春にうちまどる  
かたりつ、酌さかづきに  
このうたげにこそ樂けれ

行軍歌

我が日本の國体は  
神のは國と稱へきて

故き神代の頃よりも  
五百海坂隔てたる

遠き戎夷が國までも  
あるや草葉の露程り  
類も少なきおだまきの  
守るゝ誰の務ぞや  
五の詰戎鐵肝して  
多聚かる人の其中よ  
厚き慈愛の駿河なる  
伊勢の海すら尙は淺し  
冠なす戎夷有もせば  
打ち夷けて大君の

楠正成遺訓の歌

建武の昔し正成は  
是の一歳都攻のありし時

(六十四)

光輝く旭子の  
侮り受けし例めしだに  
盡さぬ皇帝の切續を  
誠實ある身の甘美にも  
束のあひだも忘るなよ  
醜み御楯と扱撰れて  
不二の高峯も尙はひく、  
其皇に若しやまた  
踟躕ふ事いなきものを  
御心慰め奉れ人

肌はだの守を取り出し  
下し給ひし輪言なり

之を汝に譲るなり  
世は尊氏の世となりて  
鏡にかけて見る如し  
父の子なれば流石にも  
弓張月の影暗く

(十四)

打漁されし郎黨を  
芳の山のの奥深く  
流れも清き菊水の  
敵を千里に退けて  
あゝ、敵慮を安んじ奉れ

小楠公をする歌

あゝ、正成よ正成よ  
黒くも四方にふさがりて

我兎に角になるならば  
敵慮を惱あやまし奉らんは  
さは去りながら正行よ  
忠義の道はかねて知る  
家名を汚すこと勿れ  
あわれみ扶助し穩家の  
月の桂は漣さざなみや  
旗を再ひ翻し  
敵慮を慰めたてまつれ

公せいぎよの逝去のこのかたは  
月日も爲めに光りなく

(八十四)

悪魔は天下を横行し  
あなとり果て上とせず  
たゆる間のなき人馬のと  
芳野の山に花見んと  
君が御代こそ千代くくと  
いづれの時にあるあるや  
あ、大君の御爲に  
この世の塵を拂はん  
遠くあなたを見わたせば  
くもの上まで屹立し  
見ゆる菊水の其旗は  
父のたまひしこの刀  
賊の頭らを斬せむ爲

下を塵け上をさへ  
吹き来る風はなまぐさく  
春は來れど花咲かず  
訪ひ來る人はたゑてなく  
囀る鳥の聲聞く  
なげかわしきの至りなり  
振ひ起りてけがれたる  
する人どてはあらざるか  
金剛山は巍峨として  
しげる林の木の間より  
げにこそ國の寶なり  
はらを切れとの爲ならず  
にくさもにくし彼の賊等

(三十五)

武士の身の常ぞかし  
いむかふ敵はむけをへつ  
白心休めまへらせむ  
をば君の  
いさは尊としまつるわぬ  
ひとをやはして平らけく  
みいづかしこし御軍の  
そのいさほりや

第二百十九号

をば君の

第二百二十号

ふきなす笛

ふきなすふゑのその音も

習せや慣る君がため  
かゑりて早く我君の  
急げやいそげ御軍よ  
歸營行進ノ時ニ用ユ

御稜威畏しみいくさの  
國かことほぎ千早ふる  
かへるをもひは大君の  
切續貴し其御陵威のや

葬禮ノ途上ニ用ユ

捧る旗のその色も